きすふれ！　６

きす☆ふれ　6

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20895190

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 本番無し, 見せオナ, 律霊, ぶっかけ, 顔射

今回短いです。無知シチュ師匠の総受けです。攻めたちが師匠を色々そそのかします。今回は本番無し、エク霊、モブ霊、ヨシ霊、最霊、ショウ霊、律霊、見せオナ、ぶっかけ、顔射が有ります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

きす☆ふれ　6

「「「「「「じゃーんけーん！！！！」」」」」」
誰がこの場で、霊幻のために公開オナニーをするのか。
それを決めるためのじゃんけんを、エクボが、茂夫が、ヨシフが、最上が、将が、律が真剣な顔でしている。
「よっし！！！！」
一抜けした最上が珍しく大きなリアクションでガッツポーズをしていた。
「ぜってぇやりたくねえ……！」
ヨシフが迫力ある顔で残りのメンバーをじぃっと観察する。心理戦に持ち込もうとしてるのだ。
「あっ、あっ、じゃーんけーん……！」
性格的に心理戦に持ち込まれると圧倒的に不利な茂夫が、慌てて次戦を始める。まだ運頼みの方が勝てる。
「……嘘だろ……」
呆然と、１人負けした律が、自らのチョキを眺めていた。
「あ、あの、嫌なら別に……」
「いえ、アナタの治療のためです。やります」
困惑する霊幻に、律はきっぱりと言い切った。
「じゃあ、施術台に座ってくれ。ビニールシートひいてあるから」
ぞろぞろとみんなで施術室に移動する。
霊幻の安全のために一応ついてきたものの、霊幻以外のメンバーはいたたまれなくて、できるだけ律から目を逸らしていた。
唯一、霊幻だけが、自らの治療のために、真剣に律の一挙手一投足を見つめている。
律は深呼吸をしてから、覚悟を決めてどっかと施術台に座った。
「僕の場合は……そういう気分になったら、手早く抜いてしまうので……ズボンの前を寛げて、下着の前開きから出して、こすります」
ジィっと音をさせてズボンのチャックを下げ、律はボクサーパンツの前開きから性器を取り出す。

「……駄目だ、立たない……状況が特殊すぎるんだ」
律は舌打ちをして、やぶにらみした。
「……霊幻さん、僕の前に正座して貰ってもいいですか」
「？いいけど」
ちょこん、と性器を露出した男の前に無防備に正座する霊幻に、ごくりと律の喉が鳴った。
「……ネクタイを外して、スーツとシャツのボタンを外して下さい」
「？？分かった」
きょとんとする顔を見下ろしていると、妙に幼なげに見える。
しゅるりと器用な柔らかい指がネクタイを抜き取る。
あどけない手付きで、ぷち、ぷち、とシャツのボタンが外され、悦楽を知らぬ白い肌が晒されていく。
「……っ、」
何も知らずに男の劣情に利用される霊幻の姿に、ズクズクと律の性器が充血した。
「これでいいか？」
「は……、はっ……いい感じです……」
ぷつぷつと先走りが溢れだした性器にぬめりを塗り広げ、クチュクチュと律は霊幻を視姦しながら手を動かす。
「こうやって……オカズ見ながらゆるゆると擦って、勃起させるんです」
「なるほど」
じっと性器を見つめてくる霊幻に、律は倒錯的な興奮を感じていた。それは一種、露出狂のような享楽だ。
「イきそ……っ！そうなった、ら、ヌキ用のオカズに切り替えるんです……ッ！霊幻さん、両手を『ちょうだい』って感じで差し出して、口開けてベロ突き出して下さい……ッ！」
「こう？」
その卑猥なポーズに、ぐあっと律の射精欲が高まる。
「出る……ッ！」
びゅるる、と勢い良く精液が飛び出し、ぽかんとする霊幻の顔やなだらかな胸にかかった。

ぽた、と舌から床に白濁が垂れる。
「ハァッ、ハァ……あっ！？すみません、盛り上がって思わずぶっかけちゃいました……！！」
慌てて律はティッシュで精液をぬぐう。
「なるほど……オカズにぶっかけるってのもありなんだな。ありがとう、やってみるわ」
顔に精液をつけたまま無邪気に喜ぶ霊幻に、罪悪感で律は超能力が成長した。

※

夜。
風呂上がりに、律は霊幻からの着信に気がつく。
「はい、なんですか、こんな時間に」
『律……』
その沈んだ声に、律はスマホを握り直す。
「な、何かあったんですか！？今どこに──！」

『俺、ぶっかけられないと、勃起できなくなっちゃったかも……』

「……はあぁあああ！？！？」

続